

<実践研究（査読あり）>

## 体育・スポーツ指導者を目指す学生に オノマトペの効果を理解させる授業方法

The examination of the class methods which make the understanding of the effects  
in onomatopoeia to the pre-service physical education teachers or sport coach

佐藤 麻衣子<sup>1)</sup>  
Maiko SATO

### Abstract

The Onomatopoeia is widely used in physical education teaching or sports coaching. However, students who have entered a university of physical education and sport science with the aim of becoming a physical education teacher or sports coach may think that “onomatopoeia is childish.” Therefore, in this study, the author examined a method for making students who aim to become physical education teacher or sports coach understand the effects of onomatopoeia.

The author predicted that after the students understand the structure of skills, they can understand the effects of onomatopoeia by learning the onomatopoeia of the skill. Therefore, two lessons are used in this analysis. That is, “a class that do not utilize onomatopoeia” and “a class that utilize onomatopoeia” were developed. So, the author inferred the understanding of students in the effects of onomatopoeia from the changes in the students after class. In addition, the lesson of apparatus gymnastics was targeted. And the event was front walkover. As the result, the understanding of the effects of onomatopoeia was verified in all students.

**Keywords:** onomatopoeia, pre-service physical education teachers, apparatus gymnastics, front walkover

### I. 研究の目的

ひとは日常生活において状態や感情などを伝達する手段・手法として擬音語や擬態語を用いる。この外来語は、英語では「onomatopoeia/オノマトピア」であるが、フランス語の「onomatopée/オノマトペ」の使用が一般的となっている<sup>6)</sup>。

オノマトペについて、藤野<sup>8)</sup>は「その特徴は言葉で表現しにくい感覚的な印象や具体的な事柄を口語的に表すことが可能であることからコミュニケーションを図る上で有効であると言われている。」としている。確かに、オノマトペは、本稿の対象とする体育・スポーツ場面での、『『どんどん』走る』や『『びょんびょん』跳ねる』などの「動き」を表現するものだけではなく、日常生活での『『あつあつ』のおでん』『『すべすべ』の肌』なども含まれる。そこで、吉川<sup>2)</sup>の、「スポー

ツ場面で使用されるオノマトペをスポーツオノマトペと定義するべき。」という主張もある。ただし、本稿はオノマトペの種類を検討することが目的ではないので、本稿では、以下「オノマトペ」と略すことにする。

さて、言うまでもなく、オノマトペを活用した指導法は体育・スポーツの現場において広く活用されている。他方、前記した例示のような「どんどん」あるいは「びょんびょん」などの語で運動動作や運動技能を表現することは「幼稚である」と映ることもある。特に、体育・スポーツ指導者を目指し、体育系大学に進学し、そこで初めて運動学やバイオメカニクスなどの運動技能や運動動作を分析する学問を学んだ学生に、そのような発想は生じやすいと推察される。

しかし、体育・スポーツ指導において「オノマトペ」は効果的であることは揺るがない。それゆえ、「オノマトペ」の運動・スポーツ技能習得への効果」を主眼とした研究は多々ある<sup>4) 10)</sup>。一方で、指導者や指導者を目指す者に「オノマトペの効果を理解させる」こと

<sup>1)</sup> 日本女子体育大学（准教授）

を主眼とする研究は少ない。そこで、本稿では、器械運動指導を対象に、体育・スポーツ指導者を目指す体育大学生に、オノマトペの効果を理解させる方法を検証した。

## II. 研究方法

### 1. 検証の流れ

本研究では、体育・スポーツの指導者を目指す学生が「技術の構造を理解した後に、その技術のオノマトペを学習すると、オノマトペの効果を理解することができる」と予想した。そこで、2回の授業を利用し、「オノマトペを活用しない指導」と「オノマトペを活用した指導」を展開し、「オノマトペの効果の理解」を検証した。

また、「オノマトペの効果」については、「『どの』オノマトペが効果的か」という視点と、「オノマトペには『どのような』効果があるか」という2点から把握した。前者については、代表的なオノマトペを適用した学習の効果を内省させ、また、後者については、オノマトペの学習に対する感想を自由記述させた。

授業は、2021年度に後期に開講した「器械運動Ⅰ」（スポーツ科学科対象）を利用した。全15回のうち6回目（11月1日）と7回目（11月8日）の授業を利用し、6回目を「オノマトペを活用しない指導」、7回目を「オノマトペを活用した指導」とした。

分析にあたっては、6回目の授業を、筆者による授業評価（学生の学習状況の評価）とし、「オノマトペを活用しない指導」について技能の学習状況を把握した。なお評価基準は、①足がゆっくり蹴りあがること。②脚が重心の真上で揃うこと。③脚が揃うと同時に身体が伸びること。④大きく回転すること。⑤腕を振り上げながら立ち上がること。①～⑤がスムーズに実施されることとした。

また、7回目の授業では、授業後にアンケート調査を実施し、「オノマトペの効果の理解」を把握した。なお、両回の授業の学習技は「倒立前転」であった。そこで、指導局面を5つに分け、それぞれに「オノマトペを提示しない／提示する」指導を展開した。なお各局面は、第1局面を「足を蹴り上げる」、第2局面を「足を揃える」、第3局面を「倒立姿勢から身体をのびす」、第4局面を「前転」、第5局面を「立ち上がり」とした。

### 2. 各回の授業の展開について

上記のように、本研究では「オノマトペを活用しない指導」の後に「オノマトペを活用した指導」を実施し、「オノマトペの効果の理解」を測った。各授業の概要は以下である。

#### 1) 「オノマトペを活用しない指導」の内容

##### ①第1局面「足を蹴り上げる」の指導

そもそも倒立姿勢に至るには、①手がマットに触れた後に、②足がマットから離れることが重要である。これに疑問を持つ学生（学習者）はいないであろう。

しかし、「倒立前転」に恐怖心を抱く学生（学習者）は、マットに手を触れる直前で「手の位置を前にずらす」傾向がある。これにより、①と②のタイミングを崩す場合は多く、中には、①と②の順序が逆転する学生（学習者）もいる。このような状態で足を蹴りあげるとは無意味である。そこで、第1局面では、①手がマットに触れた後に、②足がマットから離れる、という順序を強調し、「ゆっくり蹴る」ことを教示した。

##### ②第2局面「足を揃える」の指導

正しく倒立姿勢になる為には、脚が重心の真上で揃うことが望ましい。これが前方であると、回転に入る前に転倒する可能性がある。逆に、重心の真上に到達する手前で脚が揃った場合、いくつかの危険が想定され、それを理解しておく必要がある。

倒立前転において「倒立姿勢に達する手前で脚が揃った状態」から前に回転した場合、首部（頸椎）に負担がかかる可能性がある。特に、「長身」「過体重」「筋力不足」の学生（学習者）に、そのような危険が高く、注意が必要であると考えられる。そこで、第2局面では、倒立姿勢に達する手前に脚が揃った場合、「脚をマットに下ろす」ことを強調した。

ところで、ひとは逆さま（倒立姿勢）になると、「方向」の「感覚混乱」を誘発することがある。ここで重要なことはバランスを維持する為に、頭部を後屈させることである。これは荷物を頭の上に持ち上げる際、頭部を後屈する原理と類似し、自身の体重を支える為には絶対条件とも言える。そこで重要なことが視線の置き所を示すことであり、「マットを見る」という指示である。

##### ③第3局面「倒立姿勢から身体を伸ばす」の指導

この局面の実施には、第2局面「足を揃える」の技術が重要となる。なぜならこの局面では、①マットを押し、②身体を引き上げる、ことが必要だからである。しかし、①脚が揃う位置、②タイミングがずれると、身体を伸ばすことが困難となる。すなわち、第3局面がないままに回転することになる。そこで、第3局面では、第2局面で指示した「脚が揃う位置」と「足を揃えるタイミング」について再度確認した上で、「脚が揃う瞬間から身体を伸ばすイメージ」を持つことを教示した。

##### ④第4局面「前転」の指導

「前転」の技術には、「正確に身体の部位をマットにつける」ことが重要である。もっとも、「前転」と「後転」はマットに接する身体の部位は同じである。そして、「正確に身体の部位をマットにつける」ことを理解するには後転の方が容易である。なぜなら、前転を「ただ前に回転する」と捉えた場合、以下のようなケースが想定されるからである。

- マットに（頭の）額をついた場合、身体の背面をマットに着けることは困難となる。
- マットに（頭の）頭頂部をついた場合、身体を丸めることが困難となる。
- マットに手を着く前に足を蹴った場合、回転不足となる。

他方、後転では、はじめにマットに着く身体の部位は必ず腰である。したがって、「額」や「頭頂部」をマットに着くことはない。また、腰を着く前に蹴ることもあり得ない。これらを踏まえ、「後転から前転を往復する」課題を提示し、「マットに接する身体の部位」について、①接する部位は背面であること、②接する部位の順序を、後転では「腰→背中→首→後頭部」、前転では「後頭部→首→背中→腰」であること、さらに、③前転は大きく回転することを強調し教示した。

#### ⑤第5局面「立ち上がり」の指導

この局面を疎かにする学生（学習者）は多い。「倒立前転」の終了を前転と捉え、立ち上がる時に後ろに手を着く事例も間々ある。前転から立ち上がる際、後ろに手を着くということは、マットに2回手を着くということになる。学生（学習者）の中に「前転の連続」が実施できない者はいない。前転を連続するうえで回転の後にマットに手を着がつくのは一度きりで、二回、手を着くことはできない。したがって、ここでは立ち上がる時に「手を後ろに着かない」ことに加え、「腕を下から振り上げること」教示した。なお、大きな前転から立ち上がるイメージを作るため、「背倒立から立ち上がること」を反復した。

#### 2) 「オノマトペを活用した指導」の内容

オノマトペについて吉川らは<sup>4)</sup>、「運動・スポーツ領域でオノマトペが使用される場合、運動の『コツ』を表現する際の言葉として使用されることが多い。具体的には、動きのパワー、スピード、持続性、タイミング、リズムを表現する言葉として使われている」としている。

7回目の授業では6回目の授業で行った各局面について以下のオノマトペを提示しイメージを持って練習するように指示した。なお、提示したオノマトペは筆者が吉川の理論を参考とし作成したものである。

7回目の授業では6回目の授業で行った各局面について以下のオノマトペを提示しイメージを持って練習するように指示した。

##### ①第1局面「足を蹴り上げる」の指導

足を蹴り上げる際に、「そっと」「ふわっと」「えいっ」の3つのオノマトペを提示し、効果を比較させた。

##### ②第2局面「脚を揃える」の指導

脚を揃える際に、「そっと」「ふわっと」「ピタッ」「ピタリ」の4つのオノマトペを提示し、効果を比較させた。

##### ③第3局面「倒立姿勢から身体を伸ばす」の指導

倒立局面から身体を伸ばす際に、「ぐうん」「ぐん」「ううん」「うん」の4つのオノマトペを提示し、効果を比較させた。

##### ④第4局面「前転」の指導

倒立から前転に移行する際に、「くるん」「ぐるん」「ふわっ」「ふわっと」の4つのオノマトペを提示し、効果を比較させた。

##### ⑤第5局面「立ち上がり」の指導

立ち上がる際、「さっと」「すっと」の2つのオノマトペを提示し、効果を比較させた。

### 3. アンケート調査の内容と方法

#### 1) 内容

##### ①『『どの』オノマトペが効果的か』の測定

本件は、後述する「オノマトペには『どのような』効果があるか」の内省を誘引するたに実施した。「オノマトペを活用した授業」の際に提示した複数のオノマトペの中から「自分の実施にあたってイメージしたオノマトペを選択してください。」という問いを実施して、『『どの』オノマトペが効果的か』の内省を実施した。なお、選択肢（例示したオノマトペ）に該当するものが無い場合は「その他」と回答させ、あわせて具体的な表現を自由記述で求めた。

##### ②「オノマトペには『どのような』効果があるか」の測定

本稿の主題である「学生（学習者）の中に生じた『オノマトペの効果に対する理解』」を読み解くため、「オノマトペには『どのような』効果があるか」について自由記述で感想を求めた。

#### 2) アンケート調査の方法

Google フォームを利用し、7回目授業終了後、1週間の期間で実施した（2021年11月8日～14日の間）。なお、授業出席者40名のうち35名から回答が得られた（回収率87.5%）。

## Ⅲ. 結果と考察

### 1. 「オノマトペを活用しない指導」での技術習得の状況

「オノマトペを活用しない指導」では、倒立前転の各局面の技術について、要点を「専門的な用語や表現を使って」説明しながら実施させた。その結果としての技術習得の状況について、筆者（授業担当者）の観察による評価で測る。

#### 1) 第1局面「足を蹴り上げる」の指導による技術習得の状況

マットに手を触れた後に蹴り上げることを理解することで、手をマットに叩きつけるように勢いをつける実施はなくなった。また、これにより脚がスムーズに上がるようになり、「ゆっくり蹴り上げる」ことの理解と技能を概ね習得できた。

#### 2) 第2局面「脚を揃える」の指導による技術習得の状況

体操競技経験者を除いて、「毎回同じ場所で脚が揃う」学生（学習者）はいなかった。しかし、倒立静止時に「マットを見る」ことで体勢を安定させることは可能となった。また、重心の真上に到達する手前で脚が揃った場合、「脚をマットに下ろす」ことへの理解と技能を習得できた。

#### 3) 第3局面「倒立姿勢から身体を伸ばす」の指導による技術習得の状況

ここでは脚を揃える場所が安定していない。しかし脚が揃う瞬間から身体を伸ばすイメージを持つことはできた。これにより身体を伸ばす場面で体勢を立て直すことができる確率が上がった。

4) 第4局面「前転」の指導による技術習得の状況

回転時、「マットに頭頂部は着かない」ということを理解することは難しくない。しかし、「できている」という「思い込み」で説明を「聞き逃す」ことは間々ある。研究対象の学生(学習者)からも回転時に、「マットに頭頂部が着いている」という事例が生じた。この学生は倒立姿勢を安定させる技術があり、再度説明することで問題は解決された。

さて、「出来ている」「出来ていない」という「思い込み」は他の技術にも生じるが、前者の解決に時間を要することが多いと考えられる。「出来ている」と自信を持つ学生(学習者)には技術指導以前に学習者からの「信頼を得る」ことを優先すべきかもしれない。

5) 第5局面「立ち上がり」の指導による技術習得の状況

「立ち上がりに手を着く必要はない」この説明の後、立ち上がりに関する問題は解決された。対象学生には簡単な課題であるが、技の終了を理解するための重要点と言える。

2. 「オノマトベを活用した指導」の結果

1) 『『どの』オノマトベが効果的か』の内省

『『どの』オノマトベが効果的か』の内省については、提示したオノマトベについて「自分の実施にあたってイメージしたオノマトベを選択してください。」という問いを実施して、選択肢(例示したオノマトベ)から回答を求めた。なお、選択肢(例示したオノマトベ)に該当するものが無い場合は「その他」と回答させ、あわせて具体的な表現を自由記述で求めた(表中では「※」を付して記載している)。

①第1局面「足を蹴り上げる」の指導(表1)

第1局面「足を蹴り上げる」では、「そっと」「ふわっと」「えいっ」の3つオノマトベを提示した。その結果、「倒立前転の足を蹴り上げるイメージ」のオノマトベとして、「ふわっと」が51%(18名)、「そっと」が23%(8名)で、この2つで74%となった。

器械運動の技を確実に実施する鍵は「はじめの動き」にあると言っても過言ではない。なぜならそれが次の動きまた次の動きへと連鎖するからである。

表1から7割以上(その他の項目を入れると8割以

表1. 「足を蹴り上げる」際にイメージしたオノマトベ

オノマトベ	人数	割合
ふわっと	18	51.0%
そっと	8	23.0%
えいっ	4	11.0%
※すっ	1	3.0%
※スット	1	3.0%
※すっと	1	3.0%
※スパ	1	3.0%
※フッ	1	3.0%
総計	35	100%

上)の学生(学習者)が6回目の授業で説明した、「ゆっくり蹴る」というイメージを理解できていることがわかる。反して、11%(4名)の「えいっ」について2つのパターンを考えてみる。一つは「えいっ」と勢いや力を使って脚を上げようとしている場合、そしてもう一つが、倒立姿勢に至ることに恐怖心をもつ場合である。闇雲に「えいっ」と蹴り上げて、途中で動きをやめてしまうことは珍しい事例ではない。しかしそれが無意識である場合は大変危険があり、指導者として理解することが望ましい。

また、その他として「すっ」「スット」「すっと」「スパ」「フッ」が各3%(1名)であった(表中では※印を付した)。

②第2局面「脚を揃える」の指導(表2)

第2局面「脚を揃える」では、「そっと」「ふわっと」「ピタッ」「ピタリ」の4つオノマトベを提示した。その結果、「倒立前転の脚を揃えるイメージ」のオノマトベとして、「ピタ」が69%(24名)、「そっと」が14%(5名)、「ふわっと」が9%(3名)、「ピタリ」が6%(2名)、その他「スット」3%(1名)であった(表中では※印を付した)。

これらのうち、「ピタ」と「ピタリ」は倒立局面で静止するイメージが強い。しかし倒立局面で静止し、次の項目にある「倒立局面から身体を伸ばす」ことは簡単ではない。ここでは「ふわっと」「そっと」など「倒立局面から身体を伸ばす動き」につながる回答を期待したが、そのような結果は得られなかった。

表2. 「足を揃える」際にイメージしたオノマトベ

オノマトベ	人数	割合
ピタッ	24	69.0%
そっと	5	14.0%
ふわっと	3	9.0%
ピタリ	2	6.0%
※スット	1	3.0%
総計	35	100%

表3. 「倒立姿勢から身体を伸ばす」際にイメージしたオノマトベ

オノマトベ	人数	割合
ぐうん	14	40.0%
ぐん	13	37.0%
ううん	2	6.0%
うん	1	3.0%
※グーっと	1	3.0%
※しゅん	1	3.0%
※すうっ	1	3.0%
※スッ	1	3.0%
※びんっ	1	3.0%
総計	35	100%

③第3局面「倒立姿勢から身体を伸ばす」の指導(表3)

第3局面「倒立局面から身体を伸ばす」では、「ぐうん」「ぐん」「ううん」「うん」の4つオノマトペを提示した。その結果、「ぐうん」が40% (14名)、「ぐん」が37% (13名)、「ううん」が6% (2名)、「うん」が3% (1名)であった。また、その他は、「グーっと」「しゅん」「すう」「スッ」「ぴんっ」で各3% (1名)であった(表中では※印を付した)。

身体を伸ばすには「ぐうん」「ぐん」「ううん」「うん」など、手でマットを押しながら身体を伸ばすことが必要であり、ここでは9割以上の学生(学習者)がそのイメージを掴めたといえる。しかし前出した表2の結果とは矛盾がある。考えるに、倒立は「ピタ」「ピタリ」と静止すると学習している可能性である。確かに倒立静止での脚は揃っている。しかし倒立から身体を伸ばす動きにつなげるには動きを静止してはならない。ここでは「そっと」「ふわっと」と脚を揃えることが望ましいのである。なお、授業の目視及び撮影した映像の検証から、脚が垂直(重心の真上)にある姿勢で静止した学生はいないことが確認できた。

④第4局面「前転」の指導(表4)

第4局面「前転」では、「くるん」「ぐるん」「ふわっ」「ふわっと」の4つオノマトペを提示した。その結果、「前転のイメージ」のオノマトペとして、「くるん」が57% (20名)、「ぐるん」が29% (10名)、「ふわっ」が3% (1名)、「ふわっと」が3% (1名)であった。また、その他として、「くるっ」「ころん」「ゴロン」が各3% (1名)であった(表中では※印を付した)。

前転の技術は、身体の背面における適切な部位をマットに着けること、加えて大きく回転することが望

表4. 「前転」の際にイメージしたオノマトペ

オノマトペ	人数	割合
くるん	20	57.0%
ぐるん	10	29.0%
ふわっ	1	3.0%
ふわっと	1	3.0%
※くるっ	1	3.0%
※ころん	1	3.0%
※ゴロン	1	3.0%
総計	35	100%

表5. 「立ち上がり」の際にイメージしたオノマトペ

オノマトペ	人数	割合
すっと	23	66.0%
さっと	9	26.0%
※ピッ	1	3.0%
※ひゅっと	1	3.0%
※ポン	1	3.0%
総計	35	100%

ましい。しかし約6割が回答した「くるん」では大きな回転をイメージすることは困難である。倒立の「ピタ」と同じく、前転を「くるん」と回ると表記したテキストは多く存在する。小さく回転する場合はこの表現は適していると思われるが、しかし大きな回転を実施する場合「くるん」とはならないはずである。この場合「ぐるん」「ふわっ」「ふわっと」「ごろん」などが適している。なお、学生の実施を見ると、小さな回転、まさに「くるん」と前転した学生が半数以上であった。

⑤第5局面「立ち上がり」の指導(表5)

第5局面「立ち上がり」では、「さっと」「すっと」の2つオノマトペを提示した。その結果、「立ち上りのイメージ」のオノマトペとして、「すっと」が66% (23名)、「さっと」が9名 (26%)で、この2つで9割を超えた。また、その他として、「ピッ」「ひゅっと」「ポン」が各3% (1名)であった(表中では※印を付した)。

「前転において後方に手を着く実施は間々」あると前出したが、「すっと」または「さっと」立ち上がるとイメージを掴むと、この局面で後方に手を着くことが解消されることが映像からも確認できた。

2)「オノマトペには『どのような』効果があるか」の省内

前記のように、「オノマトペを活用した指導」(5回目授業)の後、「オノマトペには『どのような』効果があるか」について自由記述で感想を求めた。ここから、学生(学習者)の中に生じた「オノマトペの効果に対する理解」を読み解く。なお、本件は、①「オノマトペの必要性や重要性に関する見解」、②「オノマトペの効果に関する見解」、③「オノマトペの使い方に関する見解」、④「その他」の各観点から整理した。

①オノマトペの必要性や重要性に関する見解

表6は、オノマトペの学習に対する感想を自由記述の中から「オノマトペの必要性や重要性に関する見解」を抽出したものである。例えば、「運動が苦手なひとや、言葉で理解するのが難しい子どもなどに有効だと思った」や「指導する際にもオノマトペを使用することで理解度が上がるとも学びました」など、オノマトペの器械運動の指導への有効性を理解したことが推察される意見が多かった。また、「オノマトペは器械運動以外のスポーツや、日常生活にも活用できるとわかりま

表6. オノマトペの必要性や重要性に関する見解

<ul style="list-style-type: none"> <li>運動が苦手なひとや、言葉で理解するのが難しい子どもなどに有効だと思った。</li> <li>指導する際にもオノマトペを使用することで理解度が上がるとも学びました。</li> <li>オノマトペは器械運動以外のスポーツや、日常生活にも活用できるとわかりました。</li> <li>小さい子供でも理解できる言葉なので積極的に活用していきたい。</li> <li>小さい子どもをはじめ誰にでも分かりやすく伝えることが出来る。</li> <li>オノマトペはひとに教えるのに適していることは知っていたが、自分がやるのにも使えることがわかった。</li> <li>体に正しいやり方が身に付くような気がしました。</li> </ul>
--

した」や「小さい子供でも理解できる言葉なので積極的に活用していきたい」など、器械運動以外の場面での活用についても理解したと推察される。さらに、「オノマトペはひとに教えるのに適していることは知っていたが、自分がやるのにも使えることがわかった」や「体に正しいやり方が身に付くような気がしました」など、自分自身の技術習得にも活用できることを学んだ意見もあった。

### ②オノマトペの効果に関する見解

表7は、オノマトペの学習に対する感想を自由記述の中から「オノマトペの効果に関する見解」を抽出したものである。

オノマトペの効果を認識する意見が多数あった。例えば、「正解の身体の使い方をより意識しやすくなった」や「短時間で学習できた」など、学習効率に関する意見があった。また、「音のように表現することによって一つ一つの動きがわかりやすく伝わり実行しやすくなることを学んだ」や「器械運動とオノマトペは関係ないものだと思っていましたがイメージが湧きやすくなりました」, 「オノマトペの様にやろうとするので一箇所一箇所丁寧に意識しながらできる」など、学習の質に関する意見もあった。あるいは、「自分の中でイメージが付きやすくなり実行しやすくなった」, 「相手にどのように技を行うのかを分かりやすく伝えることができる」, 「体がリズム通りに動きやすくなるので表現がしやすくなりました」など、自分の技術学習への効果を内省した意見もあった。なお、「オノマトペの様にやろうとするので一箇所一箇所丁寧に意識しながらできる」や「順序よくオノマトペを意識することで、あくまでも感覚や実感ではあるが、正確で美しい倒立前転ができたように感じた」と、今回「技術の構造を理解した後に、その技術のオノマトペを学習すると、オノマトペの効果を理解することができる」とした予想を支持する意見もあった。

### ③オノマトペの使い方に関する見解

表8は、オノマトペの学習に対する感想を自由記述の中から「オノマトペの使い方に関する見解」を抽出したものである。

表7. オノマトペの効果に関する見解

<ul style="list-style-type: none"> <li>• 正解の身体の使い方をより意識しやすくなった。</li> <li>• 短時間で学習できた。</li> <li>• 音のように表現することによって一つ一つの動きがわかりやすく伝わり実行しやすくなることを学んだ。</li> <li>• 器械運動とオノマトペは関係ないものだと思っていましたがイメージが湧きやすくなりました。</li> <li>• 自分の中でイメージが付きやすくなり実行しやすくなった。</li> <li>• 相手にどのように技を行うのかを分かりやすく伝えることができる。</li> <li>• 体がリズム通りに動きやすくなるので表現がしやすくなりました。</li> <li>• オノマトペの様にやろうとするので一箇所一箇所丁寧に意識しながらできる。</li> <li>• 順序よくオノマトペを意識することで、あくまでも感覚や実感ではあるが、正確で美しい倒立前転ができたように感じた。</li> </ul>
--

例えば、「コツを掴みやすく、技の流れを早く覚えられることができるとわかりました。」からは「(オノマトペは) コツを掴ませるために使う」,あるいは「指導する時、相手に伝えたいが言葉で伝えづらい時に使うことで感覚からわかるようになった」といった、「使い方」を学んだことが推察される。また、「技の完成段階に合わせてオノマトペを使うことで上達のスピードを上げられると思った」「ひとによって感じるオノマトペが違うことを知ることができました」「指導をするひとに合わせてさまざまな表現ができるようになりたいと感じました」など、「(オノマトペは) 相手によって使い分ける」という「使い方」を感じたことが推察される。

### ④その他

表9は、オノマトペの学習に対する感想を自由記述の中から、前記①～③以外の観点の見解を抽出したものである。例えば、「私も無意識にやり投げを教えるときに『しゅっ』などを使っていたと振り返ることができました」と、オノマトペの指導法の学習に対する学習意欲を向上させたことが推察できる意見があった。また、「『ぐん』と『ぐうん』はとても似たような言葉ではあるが持つ印象が少し違いました。一文字違うだけでイメージが違うので、誰もがイメージしやすいオノマトペも使用してアドバイスできると良いなと思いました」や「子供たちに教えるときに自然の音で伝える方が理解してくれると思いました」など、オノマトペの指導方法の学習に対する興味関心を創出したことがうかがえる意見もあった。

表8. オノマトペの使い方に関する見解

<ul style="list-style-type: none"> <li>• コツを掴みやすく、技の流れを早く覚えることができるとわかりました。</li> <li>• 指導する時、相手に伝えたいが言葉で伝えづらい時に使うことで感覚からわかるようになった。</li> <li>• 技の完成段階に合わせてオノマトペを使うことで上達のスピードを上げられると思った。</li> <li>• ひとによって感じるオノマトペが違うことを知ることができました。</li> <li>• 動きの習得のスピードや質にも変化が出るのではないかと考えた。</li> <li>• 指導をするひとに合わせてさまざまな表現ができるようになりたいと感じました。</li> <li>• どのようなイメージを持って行えば良いのかが分かりやすくなった。</li> <li>• この局面はこうすればいいと明確に分かるようになりました。(一度倒立の状態でぴったりと静止をしなければならないのだと思っており、最初は難しそうに見えたが、優しくふわっとする得る程度で良いことを学習した。)</li> </ul>
--

表9. その他の見解

<ul style="list-style-type: none"> <li>• 私も無意識にやり投げを教えるときに「しゅっ」などを使っていたと振り返ることができました。</li> <li>• 「ぐん」と「ぐうん」はとても似たような言葉ではあるが持つ印象が少し違いました。一文字違うだけでイメージが違うので、誰もがイメージしやすいオノマトペも使用してアドバイスできると良いなと思いました。</li> <li>• 子供たちに教えるときに自然の音で伝える方が理解してくれると思いました。</li> </ul>
--

#### IV. まとめ

体育やスポーツの指導場面でオノマトベは広く活用されている。しかし、体育・スポーツ指導者を目指し体育大学に進学してきた学生には「オノマトベは幼稚である」と映ることもある。そこで本稿では、器械運動指導を対象に、体育・スポーツ指導者を目指す体育大学生にオノマトベの効果を理解させる方法を検証した。

検証にあたって、「学生が技能の構造を理解した後に、その技能のオノマトベを学習すると、オノマトベの効果を理解することができる」と予想した。そこで2回の授業を利用した。すなわち、「オノマトベを活用をしない授業」と「オノマトベを活用した授業」を展開した。そして、授業後の変化から学生のオノマトベの効果の理解を検証した。

学習課題はマット運動の倒立前転とした。その際、倒立前転の技術を5つの局面に分け、それぞれに複数のオノマトベを提示し、「自分の実施のイメージあったオノマトベ」を選ばせ、「『どの』オノマトベが効果的か」を測った。その後、「オノマトベは『どのような』効果があるか」について自由記述で回答を求めた結果、オノマトベを否定する回答は皆無であり大半の学生（学習者）がオノマトベの効果を理解したと考える。すなわち「学生（学習者）が技能の構造を理解した後に、その技能のオノマトベを学習すると、オノマトベの効果を理解することができる」と予想を支持する結果であった。もっとも、本稿は「学生（学習者）にオノマトベの効果を理解させる方法」の概観を明らかにしたものである。今後、その各論を検討していく。

#### 参考文献

- 1) 小野正弘 (2019) オノマトベ 擬音語・擬態語の世界. 角川書店. pp.256.
- 2) 吉川政夫 (2009) 子どもの感覚に響く「オノマトベ」: その可能性を考える. 体育科教育. 57: 14-17.
- 3) 吉川政夫 (2010) スポーツ指導とオノマトベ. 体育の科学. 60 (9): 613-618.
- 4) 吉川政夫 (2013) 運動のコツを伝えるスポーツオノマトベ. バイオメカニズム学会誌. 37 (4): 215-220.
- 5) 木下英俊 (2012) マット運動における倒立前転の技の構造と習得に関する 発生運動学的一考察, 宮城教育大学紀要47巻: 151-162
- 6) 窪蘭春夫編 (2017) オノマトベの謎. 岩波書店 pp.165.
- 7) 田守育啓 (2002) オノマトベ: 擬音・擬態語をたのしむ. 岩波出版, pp.178.
- 8) 丹野真智俊 (2005) オノマトベ: 擬音語擬態語を考える: 日本語音韻の心理学的研究. あいり出版. pp.190.
- 9) 藤野良孝, 井上康生, 吉川政夫, 仁科エミ, 山田

恒夫 (2005) 運動学習のためのスポーツオノマトベ, 日本教育工学会論文誌. 29: 5-8.

- 10) 藤野良孝 (2008) スポーツ・オノマトベ: なぜ一流選手は「声」を出すのか. 小学館. p.42-60.
- 11) 吉田茂・三木四郎 (1996) 金子明友監修, 教師のための運動学. 大修館館店: 25-31.